

文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究 (①必修02-15-5/5)

目 的

博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。

成 果

1. ある装飾古墳の観察室において、浮遊菌数で基準となる数値を設定し、基準を超過した際に除菌清掃作業を行うといった、モニタリング結果とIPMに基づく対策とを連動させた管理体制を実践的に試し、管理手法に関する新しい考え方の一例を示した。
2. 実際に虫菌害があった保存環境を調査対象とし、微生物および文化財害虫の分布調査およびその対策についての検討を行い、近年の虫菌害被害の傾向と対策についての研究を進めた。
3. 近年開発された即時性のある浮遊微生物分析機器を導入し、従来法との比較検討や適応可能性についての基礎研究を実施した。同様に、即時性のあるATP測定法を応用した付着微生物量の評価手法の開発に向けた基礎研究を実施し、研究成果を学会や学術誌等で報告した。
4. 虫害を受けた歴史的木造建造物において、環境低負荷型の温風殺虫処理法についての基礎研究を実施した。
5. 臭化メチルの使用全廃10年に際して、文化財等の総合的有害生物管理（IPM）に関するフォーラムの開催、研修での講演、専門向け報告書や一般向け雑誌への寄稿を通じて、教育普及を行った。

報告

- ・三浦定俊、木川りか、佐野千絵「臭化メチル全廃とその後の10年の歩み」『保存科学』55 pp.37-45 16.3
- ・間潤創、佐藤嘉則「博物館施設におけるバイオエアロゾル測定の活用について」『保存科学』55 pp.103-113 16.3
- ・木川りか「世界の状況と現在の処置法の選択肢について」『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』東京文化財研究所 pp.5-20 15.12
- ・佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか「古墳公開保存施設におけるIPMの取り組み」『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』東京文化財研究所 pp.78-84 15.12

発表

- ・佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか「虎塚古墳公開保存施設の管理方法変更による微生物汚染状況の推移」文化財保存修復学会第37回大会 京都工芸繊維大学 15.6.28
- ・小野寺裕子、小峰幸夫、木川りか「低酸素濃度殺虫法—25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討—」文化財保存修復学会第37回大会 京都工芸繊維大学 15.6.27

刊行物

- ・『臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』東京文化財研究所 15.12
- ・『文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究』東京文化財研究所 16.3

研究組織

- 佐藤嘉則、木川りか*、犬塚将英、早川典子、森井順之、吉田直人、佐野千絵、岡田健、小野寺裕子（以上、保存修復科学センター）、藤井義久、間潤創（以上、客員研究員）

*平成27年10月1日より九州国立博物館

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①必修07-15-5/5の一部として実施)

平成26年度は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」そして平成27年度には「明治日本の産業革命遺産」とユネスコ世界遺産への登録が続き、近代文化遺産が注目されており今後も近代文化遺産が世界遺産登録されることが期待されている。

これまで近代文化遺産の修復に関して、採用されてきた手法は、江戸時代以前までの建造物などに適用されてきた手法が準用される形であった。しかし今後、さらに修復の件数も増えることが予想される、近代文化遺産の特徴の一つでもある多種多様な材料が使われた文化遺産の修復作業に関して、いつまでも江戸時代以前までの修復手法の準用では対応しきれなくなるのは自明であり、早急な対応が望まれる。その際に重要となるのは近代文化遺産の修復理念であり、その土台となる保存理念である。

今回はこれまで、行われてきた保存・修復工事や計画されている修復工事などに関して、どのような保存理念や修復理念が適用されたのか検証しながら、今後必要となる保存理念や修復理念についてどのように考えていけばよいのか様々な分野の方々を招き研究会を実施した。

第29回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「近代文化遺産の保存理念と修復理念についての研究会」

日時：2016（平成28）年1月15日（金）10:00～17:15

会場：東京文化財研究所 セミナー室

講演：中山俊介（東京文化財研究所）「近代文化遺産の保存理念と修復理念」

ロルフ・フーマン（ドイツ・産業考古学事務所長）「Large Scale Industries Preservation and Conservation」

伊東孝（産業考古学会会長）「近代文化遺産の保存理念と修復理念について考える—産業遺産の活用を通して—」

木村勉（長岡造形大学教授）「近代文化遺産の保存理念と修復理念 近代洋風建築・近代化遺産の現状・課題」

鈴木淳（東京大学大学院教授）「近代文化遺産の保存理念と修復理念 産業技術史の観点から」

IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」

(①必修02-15-5/5の一部として実施)

IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」を2015（平成27）年7月16日に開催した。モントリオール議定書締約国会議による2005年からの臭化メチル使用全廃、その10年という節目に、これまでの活動をふりかえりつつ、現状での文化財分野のIPMの活動状況、進展や問題点も含めて情報を共有し、現在の課題と、今後必要な方向性を考えるための場とすることを目的とした。講演者からは、日本や世界の国々での燻蒸やその後のIPMへの取り組みの紹介や、各館の様々な取り組みについていろいろな角度からの報告があり、有意義なフォーラムとなった。

日時：2015（平成27）年7月16日（木）10:00～17:15

会場：東京文化財研究所 セミナー室他

参加者：200名

講演者：亀井伸雄（東京文化財研究所）「開会挨拶」

- 齊藤孝正（文化庁）「モントリオール議定書締約国会議・臭化メチル使用全廃から10年によせて」
木川りか（東京文化財研究所）「世界の状況と現在の処置法の選択肢について」
三浦定俊（文化財虫菌害研究所）「文化財IPMコーディネータについて」
本田光子（九州国立博物館）「建築段階からのIPM、九州国立博物館の歩み」
長屋菜津子（愛知県美術館）「IPM業務仕様書の一事例について」
園田直子（国立民族学博物館）「博物館環境データ（生物生息調査、温湿度モニタリング）分析システム・スモールパッケージの開発」
日高真吾（国立民族学博物館）「IPM実現のための予算獲得について—国立民族学博物館の事例から」
斉藤明子（千葉県立中央博物館）「タバコシバンムシとの戦い—千葉県立中央博物館の例—」
青木睦（国文学研究資料館）「アーカイブズの保存計画におけるIPM」
朝川美幸（仁和寺）「寺社収蔵庫におけるIPM」
間淵創（三重県総合博物館）「博物館施設におけるカビ等のモニタリングとデータの活用」
佐藤嘉則（東京文化財研究所）「古墳公開保存施設におけるIPMの取り組み」

総合研究会（④企）

総合研究会は、各研究部・センターの研究者がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。平成27年度は下記のスケジュールで実施した。

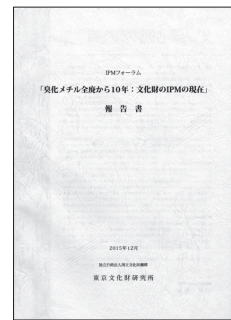
- ・第1回 2015（平成27）年10月6日（火）
発表者：吉田直人（保存修復科学センター）「展示照明としての白色LED」
- ・第2回 2015（平成27）年11月10日（火）
発表者：岡田健・吉原大志（保存修復科学センター）「文化財防災ネットワーク推進事業と文化財防災・危機管理に関する調査研究」
- ・第3回 2015（平成27）年12月1日（火）
発表者：津田徹英（企画情報部）「14世紀絵巻詞書総覧構想と有効利用について—京都・金蓮寺本「遊行上人縁起絵巻」での適用事例を中心に、その即効性と限界を考える—」
- ・第4回 2016（平成28）年1月12日（火）
発表者：高桑いづみ（無形文化遺産部）「楽器行脚20年—無形文化財としての楽器研究、その問題点—」
- ・第5回 2016（平成28）年2月2日（火）
発表者：川野邊渉（文化遺産国際協力センター）「有機化学者から見た文化財保護—実体験を中心に—」
- ・第6回 2016（平成28）年3月1日（火）
発表者：田中淳（副所長）「近代日本美術の基層をめぐって—岸田劉生を中心に—」

企画情報部研究会（④企）

企画情報部ではほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。平成27年度の開催内容は下記の通り。

『IPMフォーラム 臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』（①必修02の一環として実施）

本報告書は、2015年7月16日に開催したフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」の各講師の講演内容を基に論文集として取りまとめたものである。モンテリオール議定書締約国会議による2005年からの臭化メチル使用全廃、その10年という節目に、これまでの活動をふりかえりつつ、現状での文化財分野のIPMの活動状況、進展や問題点も含めて情報を共有し、現在の課題と、今後必要な方向性を考えた概論や事例研究の論文を掲載している。報告書の幅広い活用をめざし、掲載論文のPDFファイルをインターネット上で公開した。2015年12月刊行、84ページ。



『文化財における伝統技術及び材料に関する研究報告書 2015年度』（①必修06の一環として実施）

劣化が著しい文化財建造物の塗装彩色材料や漆塗装を有する考古資料などの各種文化財における伝統技術及び材料の調査を行い、実際の修理施工に役立てることを目的としたプロジェクト「文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究」の本年度の活動と五カ年計画の総括を行った報告書である。報告書では、①調査研究報告として、表装裂試料データベース目録一覧、②本年度開催した研究会の報告として各発表の要旨、③本プロジェクト研究五カ年の総括、を掲載した。2016年3月刊行、87ページ。



『未来につなぐ人類の技15—洋紙の保存と修復』（①必修07の一環として実施）

本書は、2014（平成26）年11月に東京文化財研究所で開催した研究会「洋紙の保存と修復」に関して、元国立国会図書館副館長、脱酸処理技術などによる資料保存を行う企業担当者、装こうの修復技師、メキシコとカナダの国立公文書館にて修復作業を担当している方々による講演と、質疑応答の抜粋をまとめたもの。2016年3月刊行、79ページ。



Conservation and Restoration of Modern Textiles（①必修07の一環として実施）

本書は、2016（平成26）年3月に発行した、「近代テキスタイルの保存と修復」の英訳版。博物館、美術館の保存修復部門の方々、研究機関の修復室の方、更には染織品修復師の方等による、近代テキスタイルの保存と修復に関する講演録。2016年3月刊行、77ページ。

